

読みのバージョン (3)

— 作者 écrivain への接近 —

竹村 信治

本稿は、国語科の「読むこと」の授業過程を“パフォーマンス課題-評価”の教育評価過程と捉え、コンピテンシー育成に向けてパフォーマンスの「質」、ひいては認知プロセスの「質」を問う一般評価基準の観点を検討する考察の第3稿である。「読むこと」におけるパフォーマンスの「質」には、“読み”の型 (= 読み方) が深くかかわっている。ここでは、第1稿でモデル化した“読みのバージョン”の第3バージョンを踏まえて、テキスト形成の言語過程における作者 (言語行為主体 = 「著作家 écrivain」) に接近する“読み”を取り上げ、これにそくした観点試案を提示した。

1. はじめに

本稿は、国語科の「読むこと」の授業過程を“パフォーマンス課題-評価”の教育評価過程と捉え、コンピテンシー育成に向けてパフォーマンスの「質」、ひいては認知プロセスの「質」を問う一般評価基準¹⁾の観点を検討する考察の第3稿である。第1稿²⁾では「読むこと」におけるパフォーマン

スの「質」、すなわち「子どもの思考と表現」 (= “読み”) の「質」には、“読み”の型 (= 読み方) が深くかかわっていると、その“読み”のバージョンの3類型をモデル化し、それらの階層性にそくした観点試案を提示した。

3類型を取りまとめ、『竹取物語』を例に具体化した図 (第1稿, 図5バージョンⅢB) を以下に再掲する (枠取り, 一部改訂)。

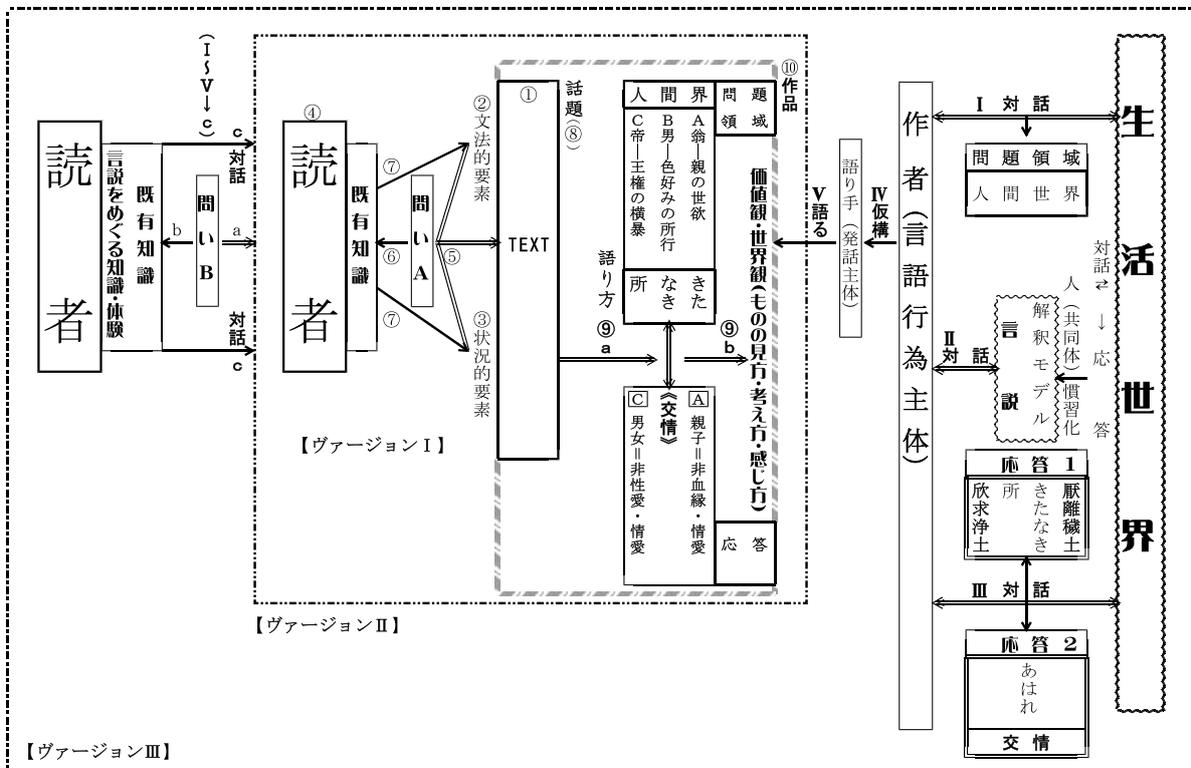


図1 読みのバージョン (I~III)

詳細は第1稿および第2稿「1.はじめに」の要約に拠られたいが、これらの3バージョンを平成28年12月21日公表の中教審「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（第一九七号）、その別紙2-2「言語能力を構成する資質・能力が働く過程のイメージ」に重ねれば、それぞれは以下のごとき“読み”として説明できる。

***バージョンⅠ：物語内容の概念的理解**

モデル図中の①から⑧のプロセスをもって物語内容（話題）を理解する読み方。中教審答申の別紙2-2の「テキスト（情報）の理解」（認識から思考へ）の内の「構造と内容の把握」に相当する。いわゆる「資質・能力の三つの柱」（学力の三要素）の内の「知識・技能」の、

- 言葉の働きや役割に関する理解
- 日本語や外国語の特徴やきまりに関する理解と使い分け
- 言葉の使い方に関する理解と使い分け
- 言語文化に関する理解
- 既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解

を活用する“読み”である。

***バージョンⅡ：問題領域をめぐる対話：-----** 枠バージョンⅠの⑧話題理解から⑨語り方の解釈に進み（⑨a→⑨b）、そこから遡及的にテキスト内対話を再構成して（a）その対話に参加し（b）、既有知識を活用しつつ自ら応答する読み方（c）。上記中教審答申の別紙2-2の「テキスト（情報）の理解」（認識から思考へ）の内の「精査・解釈」「考えの形成」に相当する。「資質・能力の三つの柱」（学力の三要素）の内の「思考力・判断力・表現力等」の、

◎精査・解釈

【創造的・論理的思考の側面】

- ▶情報を多面的・多角的に精査し、構造化する力
- ・推論及び既有知識による内容の補足、精緻化
- ・論理（情報と情報の関係性：共通—相違、原因—結果、具体—抽象等）の吟味・構築
- ・妥当性、信頼性等の吟味
- ▶構成・表現形式を評価する力

【感性・情緒の側面】

- ▶言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力
- ▶構成・表現形式を評価する力

【他者とのコミュニケーションの側面】

- ▶言葉を通じて伝え合う力
- ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解
- ・自分の意思や主張の伝達
- ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り
- ▶構成・表現形式を評価する力

◎考えの形成

- ▶考えを形成し深める力
- ・情報を編集・操作する力
- ・新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力
- ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力

を活用する“読み”だが、その「精査・解釈」をH.G.Gadamerのいわゆるテキストの「真理請求」の「解釈」³⁾に向けたものとし、「考えの形成」を「真理請求」から遡及的に把握されるテキスト内対話への読者の参入⁴⁾、すなわちテキストが主題化している問題領域 Problematik（世界理解にかかわる問題圏「～について」）を共有し、これに既有知識を活用しつつ応答する、そうした「対話」、可謬主義的「討議」⁵⁾の間の出来事とし、これを“読み”の一階梯として位置づけたのがバージョンⅡである。「資質・能力の三つの柱」（学力の三要素）の内の「思考力・判断力・表現力等」は、ここではこの「解釈」力、「問題領域」の遡及的把握力、「対話」力・可謬主義的「討議」力を構成する要素として捉え直される。

***バージョンⅢ：物語行為への批評：-----** 枠

我々の棲まう生活世界の諸事象を“パフォーマンス課題”と見なし、作品⑩をこれに応答したパフォーマンスと捉え、そのパフォーマンス全般の位相、すなわち、作者（言語行為主体＝「著作家 écrivain」⁶⁾）による諸事象との対話（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）—応答（応答Ⅰ・応答Ⅱ）、Ⅳ語り手の「仮構」、Ⅴ「語る」に亘る物語行為の位相を、読者が自らの既有知識（世界への問い—応答をめぐる「知識・体験」）を活用しつつ批評（c）する読み方。中教審答申の別紙2-2の「テキスト（情報）の理解」（認識から思考へ）の内の「精査・解釈」「考えの形成」に相当するが、これを、同答申が新たに提案した「主体的・対話的で深い学び」（第7章2）の3視点の内、

- ・（子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、）先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通

じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」
・知識を相互に関連付けてより深く理解したり、
情報を精査して考えを形成したり、問題を見い
だして解決策を考えたり、思いや考えを基に創
造したりすることに向かう「深い学び」

へと展開、深化させるものでもある。別紙2-2
「言語能力を構成する資質・能力が働く過程のイ
メージ」にいう「資質・能力の三つの柱」（学力
の三要素）の内の「学びに向かう力・人間性等」、

言葉を通じて、

- ・社会や文化を創造しようとする態度
- ・自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度、集団として考えを発展・進化させようとする態度
- ・心を豊かにしようとする態度
- ・自己や他者を尊重しようとする態度
- ・自分の感情をコントロールして学びに向かう態度
- ・言語文化の担い手としての自覚

も、中教審答申が「思考力・判断力・表現力等」の具体に説く「構成・表現形式を評価する力」を越えた「物語行為を批評する力」（世界に生起する諸事象をめぐる対話に批評的に参与する力）をもってする、このヴァージョンⅢの“読み”を通じてこそよりよく育成されるものと考えられる。

さて、こうした“読み”の3ヴァージョンの整理を承けて、第2稿では図1中のⅣ「仮構」される語り手、Ⅴ「⑩作品」生成の間の「語る」行為を取り上げ、『更級日記』を例に、語りの言語過程に着目して検討を試みた。時代の言説としての仏教的視座に立つ語り手を仮構して悔恨の語りを遂行しつつも、折々に反仏教としての物語の美的世界へと語りを傾斜させていく『更級日記』。世界に生起する諸事象を“パフォーマンス課題”とし、言説に取り巻かれながらこれに応答する対話的な営みは、物語行為ばかりでなくテキスト生成の言語過程にもある。しかもそれは、動的な揺らぎ、変転を伴って、作者（言語行為主体＝「著作家 écrivain」）の思惟の動態を生々しく伝える。語りのダイナミズム。テキスト生成の言語過程を読む“読み”もまた、ヴァージョンⅢの“物語行為の批評”に次ぐ“言語過程の批評”として“読み”方の1ヴァージョンたりうるといのがそこで確かめられたことだった。

ところで、こうした言語過程は作者（言語行為主

体＝「著作家 écrivain」）にとってどのような経験としてあるのだろうか。本稿では、その経験を読む“読み”を次なる“読みのヴァージョン”として検討する。取り上げるのは『枕草子』の清少納言である⁷⁾。

2. 書き手〈清女〉—「をかし」の評者

『枕草子』の語り手は書き手として私たちの前に現れている。それは跋文の次の記事に明らかだ。

おほかた、これは、世の中にをかしきこと、人のめでたしなど思ふべき、なほ選り出でて、歌なども、木、草、鳥、虫をもいひ出だしたらばこそ、思ふほどよりはわろし、心見えなり、とそしられめ、ただ心一つに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば、物にたちまじり、人なみななるべき耳をも聞くべきものかは、と思ひしに、恥かしきなんどもぞ、見る人はし給ふなれば、いとあやしうぞあるや。

「ただ心一つに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば」——、鈴木知太郎「随想的の章段の鑑賞」はこれを以下のように解説する⁸⁾。

脳裡にひらめくものを、そのまま筆にするとき、胸中には線条的に山なら山の、河なら河の、事物なら事物の、その名が次々に展開する。その連想・展開のすみやかなとき、次々に山名や河川名や事物が筆になる。展開が一瞬とどまって、一つの川、一つの山が脳裡を支配する。するとその山川や事物にふさわしい光景や行事や情感が浮かんで来て、また別に筆にすることとなる。

あるいは、「うつくしきもの」「ねたきもの」が胸中を次々によぎる。それに伴ってさまざまな好悪の連想が果てしなくくり展げられ、ときにはあわただしく去来し、ときにはしばらく停滞して、緩急こもごも、あるいは筆にし、あるいは捨て去って「心に思ふ事」を「なほ選り出でて」しるされたのが枕草子である

「ものはづけ」章段は、その連想展開のすみやかなおりの所産であり、「随想」の章段は、その展開がしばし、一つのもの、一つのことにとどまって、別に対象を凝視したおりの所産であるともいえそうである。

こうした『枕草子』の書き手の書く営みは、

Maurice Blanchot の次の発言を思い起こさせる⁹⁾。

小説家に対して、彼自身がその作品を書いているのではなく、作品が彼を通しておのれを探求しているのであり、彼がいかに洞察力ある人間たらんとしても、おのれを超えた或る経験に委ねられているのだということをおもひ起こさせるのは、つねに必要なことである。これは厄介な運動である。だがこれは、その自由を脅かしてはならないような或る意識の運動にすぎないのだろうか？ そしてまた、物語のなかで語っている声は、つねに或る個人の声だろうか？ 個人的な声だろうか？ それは何よりもまず、心動かさぬ彼というアリバイを通して語る、奇妙な、中性的な声ではないのだろうか？ この声は、『ハムレット』に現れるあの亡霊の声のように、ここかしことさまよい歩き、時間のすきまからでも語るようにどこからとも知れず語りかけ、しかもそれは、この時間を破壊させも変質させもしないのである。

また、Roland Barthes「作者の死」には次の言葉もあった¹⁰⁾。

書く（エクリチュール）ということは、それに先立つ非人称性（…中略…）を通して、《自我》ではなく、ただ言語活動（ことば）だけが働きかけ《遂行する》地点に達することである。

エクリチュールの零度¹¹⁾。「ただ心一つに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけ」る『枕草子』の清少納言は、かかる「地点」にあつて非人称的、中性的な声で語る書き手としてあるように見える。

このことは、この書き手が「をかし」の評言を繰り返して書きつけるところからも窺える。たとえば自賛譚のひとつの「五月ばかり」章段。

五月ばかり、月もなういと暗きに、「女房やさぶらひ給ふ」と声々して言へば、(中宮定子)「出でて見よ。例ならず言ふは誰ぞとよ」と仰せらるれば、「こは誰そ。いとおどろおどろしうきはやかなるは」と言ふ。物は言はで、御簾をもたげて、そよろとさし入るる、呉竹なりけり。(清少納言)「おい、この君にこそ」と言ひたるを聞きて、「いざいざ、これまづ殿上にいきて語らむ」とて、式部卿の宮の源中将(源頼定)、六位どもなどありけるは、去ぬ。頭の弁(藤原行成)はとまり給へり。(行成)「あやしくて去ぬる者どもかな。御前の竹を折りて、歌よまむとてしつるを、同じく

は職に参りて、女房など呼び出できこえて、ともに来つるに、呉竹の名をいとく言はれて去ぬるこそ、いとほしけれ。誰が教へを聞きて、人のなべて知るべうもあらぬことをば言ふぞ」など宣たまへば、(清少納言)「何の名とも知らぬものを。なめしとやおぼしつらん」と言へば、(行成)「まことにそは知らじを」など宣たまふ。

まめ言なども言ひ合せて居給へるに、(頼定ら)「裁えてこの君と称す」と誦じて、また集まり来たれば、(行成)「殿上にていひ期しつる本意もなくは、など帰り給ひぬるぞと、あやしうこそありつれ」と宣たまへば、(頼定)「さることには、何の答をかせむ。なかなかならん。殿上にて言ひののしりつるは。上(帝)も聞こしめして、興ぜさせおはしましつ」と語る。頭の弁(行成)もろともに、同じことを返す返す誦じ給ひて、いとをかしければ、人々皆とりどりに物など言ひ明かして、帰るとても、なほ同じことをもる声に誦じて、左衛門の陣入るまで聞ゆ。

翌朝いとく、少納言の命婦といふが、御文参らせたるに、この事を啓したりければ、(清少納言)下なるを召して、(中宮定子)「さる事やありし」と問せ給へば、(清少納言)「知らず。何とも知らで侍りしを、行成の朝臣のとりなしたるにや侍らん」と申せば、(中宮定子)「とりなすとも」とて、うちゑませ給へり。

(中宮定子ハ)誰が事をも、殿上人ほめけりなど聞こしめすを、さいはるる人をも、喜ばせ給ふもをかし。

(和泉古典叢書、132段)

評言としての「をかし」は「優越者の心」に根ざす言葉だった¹²⁾。ここで「喜ばせ給ふもをかし」と中宮定子を評する清少納言は、実体としての身分秩序を越えた「優越者」として、つまりは非人称的、中性的な声で語る書き手としてある。

『枕草子』は「をかし」の文学だという。それは、「清少納言自身がその作品を書いているのではなく、作品が彼女を通しておのれ（「をかし」を志向するおのれ）を探求しているのであり、彼女がいかに洞察力ある人間たらんとしても、おのれを超えた或る経験に委ねられている」からであり、あるいはその書く行為が「《自我》ではなく、ただ言語活動（ことば）だけが働きかけ《遂行する》地点」に達する」営みであるからのことであろう。その実際は、類聚的章段、随想的章段の「をかし」章段にいくつでも確かめられる。古文学習の定番教材として誰もが愛唱する初段「春はあけぼの」、和歌世界の景物との差異が強調されるこの章段も¹³⁾ その一つである。

3. 著作家 écrivain〈清女〉—書き手との対話

かくして、『枕草子』はエクリチュールの主体を非人称的、中性的な声で語る書き手として仮構する。しかしこの書き手は、実体的な書き手である清少納言（作者＝言語行為主体＝「著作家 écrivain」）に眼差されている主体でもある。そして、この著作家清少納言がその非人称的、中性的な声に「をかし」の評言を投げかける場合もある。一二六「九月ばかりに」章段はその例である。

- A 九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の、今朝はやみて、朝日いとけざやかにさし出でたるに、
(a) 前栽の露は、こぼるばかり濡れかかりたるも、いとをかし。透垣の羅文、軒の上などは、
(b) かいたる蜘蛛の巢のこぼれ残りたるに、雨のかかりたるが、白き玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。
- B (c) 少し日たけぬれば、萩などのいと重げなるに、露の落つるに、枝うち動きて、人も手触れぬに、ふと上さまへあがりたるも、いみじうをかし、といひたることどもの、人の心には、つゆをかしからじと思ふこそ、またをかしけれ。
(和泉古典叢書、126段)

長月の「露」をめぐる随想的章段で、教科書にも採られて清少納言の観察眼が称揚される話題だが、前半(A)中のa・bは『古今和歌集』収録の、

- a 折りて見ば落ちぞしぬべき
秋萩の枝もたわわに置ける白露
(秋上・二二三・題知らず・読人しらず)
- b 秋の野に置く白露は玉なれや
つらぬきかくる蜘蛛の糸すぢ
(秋上・二二五・是貞の親王の家の歌合によめる・文屋朝康)

を踏まえたもの。いわば共有知をなぞって読者に呼びかけ感興（「をかし」）を再認する語りであって、「清少納言の観察眼」とは無関係だ。それはいわば「先祖伝来の全権を持った諸標章」¹⁴⁾を他動詞的に書く行為¹⁵⁾の所産。あえていえば、これを演じた語りであろう。

これに対してB中のcは類例がない。『源氏物語』末摘花帖、女の鼻を見明しての帰途に光源氏が眼にした景に、

橘の木の埋もれたる、御隨身召して払はせたまふ。うらやみ顔に、松の木のおのれ起きかへりてさ
とこぼるる雪も、名にたつ末のと見ゆるなどを、¹⁷⁾

の描写があるが、これはむしろ『枕草子』本章段に想を得たものであろう。『枕草子』のそれは、以下に「といひたることどもの、人の心には、つゆをかしからじと思ふ」と続くところから見て、おそらくは清女囑目の風景¹⁶⁾であって、それを想起して「ただ心一つに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけ」たもの。鈴木論にいう「脳裡にひらめくものを、そのまま筆にする」自動詞的な書く行為¹⁷⁾の所産とおぼしく、非人称的、中性的な声で語る書き手が「彼女を通しておのれ（「をかし」）を志向するおのれ」を探求するなかで繰り出した描写であろう。その意味で、Aの「をかし」とここでの「いみじうをかし」「つゆをかしからじ」は、「をかし」の位相を異にしている。

注意されるのは、この非人称的、中性的な声を描き出した風景が、「人の心には、つゆをかしからじと思ふ」と判ぜられている点である。判じているのは作者（言語行為主体＝「著作家 écrivain」）。著作家はこうして仮構した非人称的、中性的な声と出会い、その自動詞的な書く行為の所産を相対化し、対象化し、批評する地点に立つことになる。つまり、書き手の自動詞的な「運動」としての「おのれを超えた或る経験」（＝“文学という経験”¹⁸⁾）と向き合い、自らの棲まう世界と出会い直す（「人の心には、つゆをかしからじ」）、そうした“経験”の主体としてその姿を現すのである。本稿副題にいう「接近」とはこうした「著作家 écrivain」の“経験”への接近をいう。

「著作家 écrivain」の“経験”——本章段におけるそれを伝えるのは、見たように「人の心には、つゆをかしからじと思ふ」だが、より正確に言えば、それは世界との乖離、逸脱の再確認と呼ぶべきものであろう。これは読者の共有知に呼びかける演技の語りAとの対照において、より際立つ。世界内にある現存在として慣習をなぞる一方で、そこから逸れて世界と対話する自己を非人称的、中性的な書き手を通じて解放する書く営み、しかもその“文学という経験”が疎外感をあらためて“経験”させていく。ここでの“経験”とはそのようなことだ。

しかし、この「著作家 écrivain」はそうした“経験”を自ら「またをかしけれ」と評して結ぶ。乖離、逸脱の再認をも「優越者の心」で引き取ってみせるこの「をかし」は、上に確かめた二種のそれとも位相を異にし、『枕草子』作者清少納言という主

体の世界との関わり方といったことを我々に伝えて
いるかのようでもある。

4. 書き手／作家 *écrivain* (清女)

「九月ばかり」章段はその末尾に書き手と「作家 *écrivain*」とが出会った例だが、『枕草子』章段には書記のさなかにこれが出来る例も多い。「返る年の二月廿日」章段はその分かりやすい例である。

長徳2年(996)2月の下旬、31歳の清女は鞍馬参詣帰りの頭中将藤原齐信(30歳)催促の面会を、行き違いの末にようやく定子不在の梅壺の東面の半蔀越しに果たす。以下はその場面である。

A 局は、引きもや開け給はんと、心ときめき、わづらはしければ、梅壺の東面、半蔀あげて、(清女)「ここに」と言へば、(齐信) めでたくてぞあゆみ出で給へる。

B 桜の綾の直衣のいみじう花々と、裏のつやなど、えもいはず清らなるに、葡萄染のいと濃き指貫、藤の折枝おどろおどろしく織り乱れて、紅の色、打ち目など、輝くばかりぞ見ゆる。白き、薄色など、下にあまた重なりたり。狭き襟に、片つ方は下ながら、少し簾のもと近う寄り居給へるぞ、まことに、絵に描き物語のめでたきことにいひたる、これにこそはとぞ見えたる。

C 御前の梅は、西は白く、東は紅梅にて、少し落ちがたになりたれど、なほをかしきに、うらうらと日のけしきのどかにて、人に見せまほし。(物語二)「御簾の内に、まいて若やかなる女房などの、髪うるはしくこぼれかかりて」などいひためるやうにて(齐信ト)物の答などしたらんは、いま少しをかしょう、見所ありぬべきに、
(和泉古典叢書、78段)

Aに登場した齐信の装いの「めでたき」がBで詳述される。章段末でこの一件を定子に報告した際に、清女の後に齐信と対面した女房たちから「たれも見つれど、いとかう縫ひたる糸、針目までやは見透しつる」と笑われた、その眼差しを再現したかたちだが、傍線部によれば、彼女が見たのは齐信その人ではなく「絵」「物語」の男主人公としての齐信であったようだ。その故であろう、Cの語りは清女をも巻き込んで、「物語」の文法をなぞるように対面の場を優美に象っていく。そこで繰り返されるのは「をかし」の評語。その語りは「物語」世界の「をかし」を探究する非人称的、中性的な書き手に

よるものとしてよいであろう。

ところがこの後に続くのは以下の声だった。

D いとさだ過ぎ、古々しき人(清女)の、髪などもわがにはあらねばにや、所々わななき散りほひて、おほかた色異なるころなれば、あるかなきかなる薄鈍、あはひも見えぬきはぎぬなどばかりあまたあれど、つゆの映えも見えぬに、(定子)おはしまさねば、裳も着ず、袿姿にて居たるこそ、物損なひにて、くち惜しけれ。

これを当座の所感としてもよいが、日記的章段が回想の語り¹⁹⁾であることに鑑みれば、Dに聞かれるのは「作家 *écrivain*」の声である。回想の書記が賦活する「いとさだ過ぎ、古々しき人」「つゆの映えも見えぬ」「物損なひ」の自己像は非人称的、中性的な書き手が探究する「めでたし」「をかし」の世界との乖離、逸脱の裂け目を創り出し、「くち惜し」の溜息を「作家 *écrivain*」に洩らさせることになる。

「作家 *écrivain*」の声は本章段ではもう一箇所、齐信の退場の場面にも聞かれる。

E (齐信)しばしありて、出で給ひぬ。外より見ん人は、をかしく、『内にいかなる人あらん』と思ひぬべし。奥の方より見出だされたらん後こそ、外にさる人やとおほゆまじけれ。

清女・齐信対面の景は、齐信しか見えない「外」からは「物語」の一場面と重なり、清女だけを見る「内」(「奥の方」の同僚女房)からは「いとさだ過ぎ、古々しき」「つゆの映えも見えぬ」「物損なひ」人の見慣れた日常面談の景にしか見えなかっただろう、というのがここでの「作家 *écrivain*」の声。本章段の全体は、定子とこれに仕える女房たちの職御曹司滞在中に彼ら不在の梅壺で果たされた、「物語」世界を彷彿させる齐信との私密的な対面の時間を、非人称的、中性的な書き手が再現するものだが、そのさなかに「外」「内」に二元化した眼差しで場面を評するEのエクリチュールは、「をかし」を生きようとする書き手(「外」と実体的な書記行為の主体である清少納言(「内」との、また、「物語」世界と類比的な定子、齐信らが棲まう「をかし」き宮廷社会(「外」と「いとさだ過ぎ、古々しき」「つゆの映えも見えぬ」「物損なひ」人たる自己の世界(「内」との、懸隔の象徴でもある。この書き手との出会いもまた、「作家 *écrivain*」に自らの生の現実の再認を迫るものであろう。

興味深いのは、そうした“経験”を「作家 écrivain」に迫るこの想起の語り、その後の職御曹司での次のようなエピソードを語って結ばれている点である。

F (定子)「この事(物語論議)どもよりは、昼、齊信が参りたりつるを見ましかば、いかにめでまどはまし、とこそおぼえつれ」と仰せらるるに、(女房)「さて、まことに常よりもあらまほしうこそ」など言ふ。(清女)「まづその事をこそは啓せん、と思ひて参りつるに、物語のことにまぎれて」とて、ありつる事ども聞えさすれば、(女房)「たれも見つれど、いとかう縫ひたる糸、針目までやは見透しつる」とて笑ふ。

(女房)「(齊信)『西の京といふ所のあはれなりつること。もろともに見る人のあらましかば、となんおぼえつる。垣なども、皆占りて、蒼生ひてなん』など語りつれば、宰相の君の、『瓦に松はありつるや』といらへたるに、いみじうめで、(齊信)『西の方、都門を去れることいくばくの地ぞ』と口ずさみつる」ことなど、(女房)かしがましきまで言ひしこそ、をかしかりしか。

定子のもとで齊信が語ったという「西の京」の一件(波線部)は、すでに清少納言が梅壺の東面で半部越しに聞いたことであっただろう。そこでは「もろともに見る人のあらましかば」が清女一人に向けて囁かれたはずだ。『白氏文集』四・「驪宮高」を踏まえた「瓦に松はありつるや」問答²⁰もすでに彼女がなしたことであったかもしれない。そうした出来事をその場にはいなかった彼女に「かしがましきまで」語る女房たち。これを「をかしかりしか」と評して閉じるのが本章段だった。

齊信・清女の面会場面では一切触れられなかった面談内容をこうしたかたちで暗示するのは、先にも述べた、「物語」世界を彷彿させる齊信との対面の私秘性を際立たせる趣向だろうが、それは同時に、公的な場で対面する女房たちと私的な齊信からの申し出によって応談した自己との差異を際立たせるものでもある。そんなことは先刻承知、齊信はそれを私一人に真っ先に語るために夜中に、そして早朝に訪れたのだ。「かしがましきまで言ひしこそ、をかしかりしか。」はその折の「優越者の心」を語る文言にほかならない。

興味深いというのは、そうした心意を含む「をかし」の評言が、見たような「作家 écrivain」の“経験”、すなわち、「いとさだ過ぎ、古々しき」「つゆの映えも見えぬ」「物損なひ」の言わば劣位感情

の湧出をもってなる自らの生の現実の確認の後に語られていることである。清女はこれも応接当座の齊信描写にはなかった「縫ひたる糸、針目まで」を大仰に褒め称えて定子とその女房たちに笑いを提供する。定子とその女房たちが滞在する職御曹司で、笑われ者として猿楽言に道化を演じる清女。その彼女が、自身の私的な体験を内に隠して定子の「昼、齊信が参りたりつるを見ましかば、いかにめでまどはまし」、女房たちの「かしがましき」言い囁しを「をかし」と聞いたというのがここでの構図だ。それは、両者の乖離、懸隔を前提にこれを「をかし」の「優越者の心」で引き取ってみせるという点で、前節「九月ばかり」章段末尾に相同的である。けれども、このエクリチュールは、「九月ばかり」章段末段のような「作家 écrivain」のものではなく、「作家 écrivain」の眼差しを備えた書き手、すなわち、劣位感情とともにある乖離、懸隔、逸脱を生きた実体的な自らの生を認容しつつ、しかも想起の語りに「をかし」を探究し、そこで非人称的、中性的な声をなおも響かし続ける書き手のものであろう。章段の全体に漂うアイロニカルな笑いの気配、それはおそらくこの書き手のアイロニーに由来する。

5. おわりに一元輔が後といはるる君(清女)

「作家 écrivain」の内向する眼差しを内包した書き手の姿は、これも諸段に見ることができる。たとえば、教科書教材に「香炉峰の雪」として採られて著名な「雪のいと高う降りたるを」章段。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火起こして、物語などして集りさぶらふに、「少納言よ、香鑪峰の雪、いかならん」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。人人も、「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそ寄らざりつれ。なほ、この宮の人にはさべきなめり」と言ふ。
(和泉古典叢書、284段)

あるいは、「二月つごもりごろに」章段。

二月つごもりごろに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪少しうち散りたるほど、黒戸に主殿司来て、「かうてさぶらふ」と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の」とて、あるを見れば、懐紙に、
少し春ある心地こそすれ

とあるは、げに今日の気色にいとようあひたる、これがもとはいかでか付くべからん、と思ひわづらひぬ。「誰々か」と問へば、「それぞれ」と言ふ。皆いと恥かしき中に、宰相の御答を、いかでかことなしびにいひ出でん、と心一つに苦しきを、御前に御覽ぜさせんとすれど、上のおはしまして、御殿籠りたり。主殿司は「とく、とく」と言ふ。げに遅うさへあらんは、いととり所なければ、さはれとて、

空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書いて、取らせて、いかに思ふらんとわびし。これがことを聞かばや、と思ふに、そしられたらば聞かじ、とおほゆるを、「俊賢の宰相など、「なほ内侍に奏してなさん」となん定め給ひし」とばかりぞ、左兵衛の督（藤原実成）の中將におはせし、語り給ひし。

（和泉古典叢書、102段）

いずれもいわゆる自賛譚だが、章段末尾（傍線部）に「この宮の人にはさべきなめり」、「なほ内侍に奏してなさん」の他者の評言を引くのは、見てきた「作家 *écrivain*」の眼差しを備えた書き手にほかならない。この書き手は、「この宮の人」（定子後宮女房）「内侍」（内裏女房）との懸隔を劣位感情をもって再認しつつ生きる作者＝言語行為主体＝作家 *écrivain*＝「元輔が後といはるる君」（「五月の御精進のほど」章段、和泉古典叢書、95段）たる受領の女に、こうした評言を与えることで「をかし」き宮廷世界での居場所を与えていくのである²¹⁾。『枕草子』の自賛譚とは、「作家 *écrivain*」の眼差しを内に組み込んで「をかし」を志向するこうした書き手のエクリチュールの所産だった。

以上、「読みのヴァージョン」としての作者（言語行為主体＝作家 *écrivain*）への接近を、『枕草子』を取り上げて試みた。あらためて述べるまでもないことだが、作者はその日々の生活の中にも、来歴中にも、伝記中にも、テキストの物語内容にもおらず、書く営みの中にこそその姿を現す。しかもこの作者は「文学という経験」の主体として、またその主体と出会う作家 *écrivain*）として、さらには「作家 *écrivain*」の眼差しを内在化させた書き手としてもエクリチュールを遂行する。作者への接近とはそうしたエクリチュールのさなかでの「経験」の現場に立ち会うことだが、このレクチュールこそが世界と対峙して生を問う現存在の生々しい現実との出会いを読む者に用意するのであろう。生を賭けて書くことの中に生きるこうした他者との出会いもまたコンピテンシーの育成にとっては必要なこと。

したがって、その出会いは「読み」のパフォーマンスの「質」、ひいては認知プロセスの「質」を問う一般評価規準の観点たりうる。

注

- 1) ルーブリックには、ある教科や領域で共通する「一般評価基準」と、それをもとに課題ごとに作っていく「課題別評価基準」があるが、本稿では前者を課題とする。松下佳代『パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—』日本標準ブックレットNo.7, 2007, 日本標準。p.23。
- 2) 竹村「読みのヴァージョン—パフォーマンス評価の観点—」（『中等教育研究紀要』62, 2016.3）。なお、第2稿は「読みのヴァージョンⅡ—語りのダイナミズムへ—」（同63, 2017.3）。
- 3) H-G Gadamer『真理と方法Ⅱ—哲学的解釈学の大綱』1960, 第4版1975, 巒田収・巻田悦郎訳, 2003, 法政大学出版会。同書訳註*108, p.664。
- 4) 注3, 同第二部第2章第3節c「問いの解釈的優位」β, pp.571-572。
- 5) Jürgen Habermas『コミュニケーション的行為の理論』1981, 岩倉正博・藤澤賢一郎訳, 1986, 未来社。第三章第一, pp.48-49。
- 6) 竹村「文学という経験—教室で」（『文学』15-5, 2014.9, 岩波書店）。注1, pp.47-48。以下、再掲しておく。
「作家」(*écrivain*)。R・バルト〈一九五三〉『エクリチュールの零度』I「政治的なエクリチュール」等。森本和夫・林好雄（訳註、一九九九）の訳語による。R・バルト（一九六〇）「作家と著述家」、R・バルト（一九七一）「作家、知識人、教師」では「作家」と訳出。森本和夫・林好雄の同上書訳註（I 33）では、「言語（ランゲージ）をコミュニケーションの道具、思想の伝達手段として用いる、つまり語り（パロール）を手段として他動詞的に書く」《著述家 *écrivain*》の対語で、「ただひたすら語りを練り上げることによって、目的なしにいわば絶対的に自動詞的に書く作家」をいうとする。なお、R・バルト（一九六八）「作者の死」では、テキストと同時に誕生して言語活動を維持する主体〈書き手 *scripteur*〉に「先行」するものと見なしている。稿者はこの「書き手」をエクリチュールの場の（語る主体）と見なして、実体的な「作家」とは区別している。後述。また「作者の死」では、「作者」に *auteur* が用いられ、*écrivain* と区別されている点にも注意しておきたい。後述。なお、小著『言述論』（笠

- 間書院, 二〇〇三), 参照。
- 7) 以下については, 竹村「枕草子の言述」(稲賀敬二編『論考 平安王朝の文学——一条朝の前と後——』新典社, 1998。『言述論 for 説話集論』笠間書院, 2003に補訂再録)及び「類聚と想起—『枕草子』の言述・続考」(浜口俊裕・古瀬雅義編『枕草子の新研究—作品の世界を考える』新典社, 2006), 参照。
- 8) 鈴木知太郎「随想的の章段の鑑賞」(岸上慎二編『枕草子必携』, 学燈社, 1967)。p.184。
- 9) Maurice Blanchot「ロマネスクな明るみ」(1959, 『来たるべき書物』粟津則雄訳, 1968, 改訳1989, 現代思潮社)。
- 10) Roland Barthes「作者の死」(1968, 『物語の構造分析』花輪光訳, 1979, みすず書房)。
- 11) Roland Barthes『エクリチュールの零度』1953, 森本和夫・林好雄訳注, 1999, ちくま学芸文庫。
- 12) 渡辺実「枕草子心状語要覧」(新日本古典文学大系『枕草子』1991, 岩波書店)。pp.363-364。
- 13) 注8, 同。pp.190-192。
- 14) 注11, 「言語のユートピア」。
- 15) 注6, 参照。
- 16) ハナムラチカヒロ『まなごしのデザイン—〈世界の見方〉を変える方法』2017, NTT出版。第I章, pp.11-14。
- 17) 注6, 参照。
- 18) 注6 竹村稿, 参照。
- 19) 注7 竹村稿, 参照。
- 20) 増田繁夫『枕草子』和泉古典叢書1, 1987, 和泉書院の当該章段頭注は次のように記す(頭注四, p.67)。
「翠華来タラズ歳月久シ。牆ニ衣(こけ)有り, 瓦ニ松有り。吾ガ君位ニ在ルコト已ニ五載。何ゾ一タビ其ノ中ニ幸セザル。西ノカタ都門ヲ去ルコト幾多ノ地ゾ。吾ガ君遊バザルハ深意有り」(『白氏文集』四・「驪宮高」)。玄宗皇帝の離宮を詠んだ新楽府。「翠華」は天子の旗, 「松」は瓦松で, しのぶ草。驪宮の荒れたのを, 西京の様子になぞらえている。
- 21) 102段での短連歌の付句は『大納言公任集』に「吹くそむる風もぬるまぬ山里は」とあって, 公任が「少し春ある心地こそすれ」句を何人かに送って応答を求めたことが知られる。清少納言の付句は『大納言公任集』の採るところとならなかったが, それを貴顕に賞讃されたと本章段に語る場所にもこれを指摘することができる。
- ※引用文献(引用に際しては表記等, 改めたところがある)

- ・『枕草子』…和泉古典叢書1『枕草子』和泉書院, 1987。
- ・『古今和歌集』…新日本古典文学大系5『古今和歌集』岩波書店, 1989。
- ・『源氏物語』…新編日本古典文学全集20『源氏物語①』, 小学館, 1994。